

双曲的時間割引による選好逆転は不合理なのか？—実践的合理性の本来の姿

染谷昌義（高千穂大学准教授）

マッチング法則、双曲的時間割引、選好逆転、近未来の誘惑への抵抗

行動主義心理学のパラダイムのなかでは、人間を含めた一部の脊椎動物のオペラント行動には、その強化頻度と行動頻度とのあいだに量的な関数関係が見出されてきた。ハーンシュタインのマッチング法則によれば、ある報酬を選択する行動頻度は報酬量の大きさや報酬の頻度に比例し、行動の後に報酬が得られるまでの遅延時間の長さに逆比例することが示された。この法則に依拠しながら、エインズリーらは、相対的に遠い将来に得られる報酬（効用）と、近い未来に得られる報酬（効用）とのあいだの価値が、時間軸に沿って双曲線的な割引を示すことをハトやラットの行動実験からも実証し、意志の弱さを説明する一つのモデルとした。

もしこの時間割引による選好逆転現象が一定水準以上の生物に認められる「自然な」心理／生理的特性であるとすれば、アクラシアは不合理性を示す現象ではないかもしれない。というのは、たしかに「Aをしよう／すべきだ／したほうがよい」と決めた判断が、報酬が得られる時点になると誘惑に負けてしまい、禁止した行為を行ってしまうのであれば、判断が通時的一貫性をもたないことから、その行為には不合理という烙印が押されよう。しかしながら、誘惑に負けること、言い換えれば、誘惑に抵抗できないことが生物にとって不可避な「自然」的傾向であるとすれば、むしろ誘惑に抗える余地があることを含意させる行為の解釈（「不合理」という性格づけ）こそ、理にかなっていないということにならないだろうか。

たとえば、食物を口に含むと味蕾への刺激により反射的に（「自然に」）唾液が分泌される。「唾液分泌はすべきでない」と判断し、食物を口に含むとしよう。当然、唾液が出る。このとき、唾液が出るのが不合理なのだろうか、それとも「唾液を分泌すべきでない」という判断の方が不合理なのだろうか。当然、後者であろう。「すべき」は「できる」を含意しなければならない。自然的傾向からしてできないことには、合理不合理の解釈は成り立たない。しかし、このケースでは、唾液分泌がそもそも単なる出来事であり行為ではないのに対し、アクラシアのケースで問題になっているのが行為であるという反論も可能である。そして、時間割引による選好逆転が提起する不合理に関する哲学的争点は、おそらくこの点にある。

選好逆転が自然な傾向でありながらも、それに不合理という性格づけを私たちがしたくなるのは、選好逆転が起こる時点までのあいだに、選好逆転を避けるための判断や行為選択（たとえば、誘惑のある場所に近づかないなど）を為すことが「できる」からである。すると、判断の通時的一貫性が破られることにまつわる不合理さとは、伝統的な議論における知と行為との背反ではなく、むしろ選好逆転を考慮に入れずに誘惑に屈してしまった過去の失敗から、選好逆転が起こりうることを教訓として学びとり、それに抵抗する準

備をしないでいたことにある。問題は、行為を導く知の不十分さにあったのだ。

アクラシアが時間割引による選好逆転として説明されるとき、行為や動機の合理性についての議論の焦点は、選好逆転に対抗する手段の選択（そしてその有効性）、換言すれば、「近未来の誘惑に対抗する自己コントロール」の成功／失敗へと移行する。エルスターは、こうした手段の選択に示される合理性を主観的で「不完全な合理性」と呼んだが、それは、時空的に近接する誘惑に取り囲まれた環境のなかで誘惑に負けずに生きる道を探し出すという、実践的合理性の本来の自然な姿と考えられる。そこから導かれる合理的人間像とは、誘惑に真正面から抵抗しそれを我慢する強い人というより、誘惑に通じる道をあらかじめ封鎖し回避する事前工作人である。

参考書

ジョン・エインズリー（2006）『誘惑される意志』、山形浩生訳、NTT出版

ヤン・エルスター（2008）『合理性を圧倒する感情』、染谷昌義訳、勁草書房

Elster, Jon (1999) *Ulysees Unbound*. Cambridge: Cambridge University Press.

Elster, Jon & Ole-Jørgen Skog (eds.) (1999) *Getting Hooked: Rationality and Addiction*, Cambridge: Cambridge University Press.